



Title	Polyandre, histoire comique の réalisme
Author(s)	田子島屋, 和子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1972, 5, p. 41-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47730
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Polyandre, histoire comique の réalisme

田子島屋 和 子

1648年 Fronde の乱前夜、世に出た *Polyandre* は、王室修史官で学殖豊かな多作家 Charles Sorel の真に réaliste な意図から生まれた稀少の作品である。その réalisme は当時としては無類の現実に密着した力強さを持つ。17世紀古典主義完成途上の時代にあって、正当な文学 genre として未公認の小説の中に、réalisme が何のような特徴をもって現われたかを、Sorel 初期の小説から出発して眺めてみたい。

I. Sorel 初期の nouvelles galantes と histoires comiques

良識の名のもとに読者の啓発を目指す Sorel は、*Histoire amoureuse de Cléagénor et Doristée* (1621) 巻頭で流行の技巧的文体を排し、*Le Palais d'Angélie* (1622) の序文で《ces histoires monstrueuses qui n'ont aucune vray-semblance》から遠ざかる所信をのべている。彼は早くから本当らしい小説 roman vraisemblable を主張して止まなかった。

彼の小説の第一作は action を同時代のフランス 及び親しい隣国イタリアの Florence にとったが、第二作はフランス、特に Paris 近郊に action をおき、物語に真実の雰囲気を強めようとする。作中人物もごく普通の貴族か町人の男女で、《les humeurs des personnes comme elles sont⁽¹⁾》を写すのを初めから旨とする。一見この当然極まる以上の条件を満たす17世紀小説は誠に少い。中世以降に action をおくことすらが例外で anachronisme は避け難い結果であった。異国趣味から 古代ギリシア・ローマ・

エジプトやトルコを舞台に、超人的非凡さを持つ王侯貴顕達の壮挙と恋愛を語る冒険小説がもてはやされた。そこには騎士小説の遺産である魔法の世界の中で展開する *fantastique* な冒険、ギリシア小説、特に *Les Ethiopiques* 崇拜から来る ひっきりなしに連発する *romanesque* な事件が盛沢山に折込まれていた。または宮廷貴族の服装と言葉遣いの羊飼達の登場する牧歌小説が公衆の熱狂的歓迎を受けていた。これら流行小説の虚偽ほど若い Sorel をいら立たせるものはなかった。

Sorel は *Les Nouvelles françoises* (1623) で更に前進し、身分違いの男女、貴族の令嬢と町人出身の従僕、青年貴族と町家出の *suivante* の恋、農民男女の恋を語り、低い身分の人々の心情にも目を注ぐ。 *Le Palais d'Angélie* が《*Madame Soeur du roy*》に献呈された作品のため留意した《*bien-seance*》、身分の釣合った幾組かの貴族子女の清純な恋物語の繊細優美な調子は、ここでもかなり無視される。情熱に走り私生児を生む娘、妻が寵愛を得た英国王に敢然抗議する貴族、貞淑な夫人を虐待毒殺を謀る貴族を描く。

同時代の現実をあるがままに写した《*images de l'Histoires* (sic)⁽²⁾》であるような物語が Sorel の求めるところであった。彼は Boccace, Margueritte de Navarre, Bandello, Cervantes の *nouvelles* を高く評価する。Nouvelle はその言葉の示す通り《*des choses arrivées depuis peu*》⁽³⁾を語るのが原則で、時には全く本当の話でもあり、*vraisemblable* であるのみでなく *vrai* の場合もある。話が長くなると *roman vraisemblable* と Sorel は呼んでいる。

しかし Sorel にとって小説が単なる恋愛冒険物語に終止することは望むところではなかった。小説の対象を恋愛だけに限ることは、現実の広大な部分が書きもらされることに他ならない。一般に真面目な小説の文体は、社交界の男女の用いる言葉であることが要求されたから、さまざまな身分や職業の人々を彼等が実際話しているフランス語を話させながら写生

することは、style comique et satirique にのみ許される特権であった。公衆は小説が恋愛物語でないなら、笑わせる物語を要求していた。

Sorel は滑稽小説 *histoire comique* に着目する。*L'Ane d'or* や *Satyricon* のラテン小説、*Le Décaméron*、中世の *fabliaux* に始まるゴールの伝統をひく陽気な一連の文学、*Les Cent Nouvelles nouvelles*、Rabelais の作品、*L'Heptaméron*、*Contes et Discours d'Eutrapel*、*Les Serées*、17世紀に入って *L'Euphormion* (1603-1610)、*Histoires comiques* (1612)、*Les Aventures du Baron de FÆNESTE* (1617-1619-1630)、*Les Fragment d'une histoire comique* (1622) 等の生命力に溢れた、色彩の高い作品が公衆に歓迎されていたし、17世紀初頭にスペインから入った *Don Quichotte* や悪漢小説 *romans picaresques*、*Lazarillo de Tormes*、*Don Guzman d'Alfarache* の翻訳の成功も Sorel が彼独自の *histoire comique* を書く意慾をかき立てた。

こうして1623年に出た *Histoire comique de Francion* は、libertin の青年貴族 Francion の Bretagne での生立、Paris での学生生活、客延進出の幻滅、幸福の追求を主軸とし、当時のフランス社会を鋭く観察批判した、驚くべき大胆な小説で、60数版を重ね英独蘭語に翻訳される大成功を収めた。

飢えに苦しむ学生達の生活、Saint-Jacques 街の本屋に集う文人達の赤貧生活、大混雑の Louvre 宮の ballet、軽佻浮薄な宮廷人の集うサロン、盗賊・娼婦・女衒の悪の世界、村の結婚式と多彩な場面が展開する。社会問題が提起される。大貴族の食欲と気紛れでひき起される戦争の犠牲になる庶民の悲惨。高利貸の馬鹿息子が判事の職を買い正義を司るのを許す売官制と政治の腐敗。軍人貴族の学問軽蔑と病的決闘熱。夜の辻強盗に出る貴族達の貴族の名に恥ずべき精神の墮落。金銭や贈物で買収され動く法官達。同じ町人でも 商人と弁護士との反目。その上に君臨する 徴税官の存在は、前述の同年出版の *Les Nouvelles françoises* で父の巨万の富を息子

が舞踏会や *collation* に濫費し王侯と贅を競う記述に指摘を譲っている⁽⁴⁾。一般庶民や農民は愚鈍で無智、迷信深い。学問を修めその才気で大貴族に奉仕し世に出る日を待つ小貴族 *Francion* は、きらびやかな衣裳や財産にしか目をくれず人間の価値を認めぬ世人の前で苦しむ。

Francion は作者が *Advertissement d'Importance aux Lecteurs* で確認しているように、陽気な《*Une satire*》であり、《*corruption de ce siecle*》を糾弾する。《*la plus part des Seigneurs sont plus chevaux que leurs chevaux mesmes. Ils ne s'occupent à pas un exercice de vertu*》⁽⁵⁾。故に、悪しき貴族を善良な百姓以下とし、守銭奴の成り上り貴族の魂の卑小さを軽蔑し、真の貴族とは何かを説く *Sorel* の牙は鋭い。その *réalisme satirique* は激越で強烈なエネルギーに満ちている。

1620年代初頭を支配した *Théophile de Viau* を旗頭とする自由思想を証言する唯一の17世紀小説として、*Francion* は悪しき性格を持った世人の《*asnerie*》を嘲笑し《*une philosophie qui n'est jamais venue dans la cervelle de tous nos vieux resveurs*》を説き、人間を未来に向かって解放することを目指していた。*Francion* の *réalisme* は高邁の精神をもって真に人間らしく生きることを主張する *active* な思想に支えられたものであった。この書物の出版後間もなく、*Le Parnasse satyrique* の作者と宗教的権威筋からにらまれた *Théophile* が司直の厳しい追求と処罰を受けることになり、言論と出版の自由は1623年を境にして日増しに後退の一途を辿ることになる。*Sorel* は自作が匿名で出たものとはいえ、危険を感じて1626年、1633年の続篇追加版で問題箇所を削除する。表現の面でも初版は出た当時の自由な空気を反映し、言葉の生々しさや *obscène* な場面に事欠かず、*scatologie* もあり、後日の改訂版さえも部分的に *pittoresquement ordurier* である。

しかし *Francion* の真実であるなら醜悪さも辞さぬ *réalisme grotesque* は、美への無感動を意味しない。*Francion* の *galentrie* や *Bajamond*

との決闘における raffinement の追求, l'âge d'or を未来への展望の中に夢見る poésie を見てもわかるだろう。Francion の réalisme はまた poétique でさえある。G. Reynier が histoire comique を roman picaresque のフランス移植という線において捉えたのは同感し難い。⁽⁶⁾ Picaro は飢えに苦しみ悪を犯し神なき人間の悲惨を認識する存在で、深遠な神学的照明をあてられた創造物である⁽⁷⁾のに反し、Francion は redresseur de torts で似ても似つかぬし、教養豊かな洗練された趣味を持つ貴族で、これ esprit の化身として若々しい夢に溢れ、詩的雰囲気さえ漂わせている。

フランス社会の全階級の人々の性格と行為と言葉を、出来る限り正確に写し取ろうとする Sorel の野心は並のものではない。

Dans mon livre on peut trouver la langue Françoisse toute entiere, et que je n'ay point oublié les mots dont use le vulgaire, ce qui ne se void pas par tout, car dans les livres serieux l'on n'a pas liberté de se plaire a cela et cependant ces choses basses sont souvent plus agreables que les plus relevées.⁽⁸⁾

文学作品がこの世の大部分の人間を身分が低いからと言って軽蔑し無視するのは間違っている。Sorel は好んで les petites gens を描く。そこから彼の réalisme は vulgaire であることを誇りにさえる。それでいて彼の作品は少しも月並でなく鑑賞に耐える。

1627年最も愛読され評判の高まる一方だった *L'Astrée* の存在を妬ましく思いつつ、またリボンをつけた羊飼の気取った愛の夢物語の仮構に業を煮やした若い Sorel は、Cervantes の *Don Quichotte* の騎士小説 *Les Amadis* 攻撃の向うをはって、*L'Astée* 攻撃、ひいては《impertinences des Romans et de la Poésie》を打倒する *Le Berger extravagant* (1627-1628) を著わす。彼の第二の histoire comique であり、尨大な文学諷刺は Homère, Virgile, Ovide, Arioste, 殊に Ronsard, Rabelais, Cervantes の作品、近年出た目ばしいあらゆる小説や詩の欠陥を袋叩きにし、古代へ

の不敬を誇示する。その批評は正当なものも多いが、間違いも多い。《Les histoires Comiques et Satyriques n'ont rien que l'on doit admirer⁽⁹⁾》と自己矛盾さえ示す。中傷的傾向は免れぬ。後日若気の過失と *L'Astrée* の美しさを認めて、《ouvrage tres exquis, dont plusieurs aventures sont dans le genre vray-semblable, et les Discours en sont agreables et naturels.⁽¹⁰⁾》と反省しているものの、*Le Berger extravagant* を *Francion* 凌ぐ作として相変わらず語っているところを見ると、Sorel が真剣に取組んだ作と思われる。同書は17世紀中15以上版を重ね英蘭語に翻訳された。1633~1634年版が *L'Anti-Roman ou l'histoire du Berger Lysis* と変更した表題の示すごとく、それはまさしく anti-roman であった。

Saint-Denis 街の絹物商の息子で25才になる Lysis は小説の読み過ぎから頭がおかしくなり、羊飼の衣裳をつけ汚い羊の群を連れて郊外の Saint-Cloud の野原を、意中の下女 Charite に思いを馳せてさまよう。牧歌の夢の世界の存在を信じて疑わぬ Lysis は一団の有閑貴族に *L'Astrée* の舞台 Forez に巡礼に行こうと誘われ、実は彼等の別荘地 Normandie の Brie に赴き、貴族達にかつがれて次々と滑稽な事件をまき起す。

L'Astrée の夢に酔って実生活の中にまで作中人物の名前や服装や礼儀作法を持ち込んだ17世紀社交界の人々の熱狂を知るなら、狂人 Lysis の所業は後世の批評家達 Reynier, Magendie 等に invraisemblable ときめつけられているが、Sorel には全く不可能ではなかった、あり得たかも知れぬ事柄に他ならない。その面白さは無智無学の徒や半可通の徒には表面的にしかわからぬほど、Sorel 自身が Remarques をつけて解説しなければ気がすまなかったほど、並外れた学殖を要求し、高級有識読者層を対象とする面白さであった。

Ronsard の Sonnets に倣って、Charite の部屋の窓辺に花を捧げようと思い立った Lysis の頭上に、階上の別の女中の窓から手が伸び尿瓶を

空ける。それを自分に好意を示して恋人が eau d'Ange をふりかけていると信じ込み感謝の叫びをあげる。《Ha ma belle! quel doux presage! ne me jetez vous pas de l'eau pour signifier que vous desirez esteindre mes feux? mais quoy, mon Soleil, abaissez vous vostre qualité et voulez vous devenir Aurore, puis que vous me jettz cette rosee?》⁽¹²⁾ 着想の洗練, Lysis の langage galant と現実の matériel な grossièreté との間には天地の開きがある。この réalisme grotesque は burlesque と呼んでいいところのものである。

この途方もない物語の中で Lysis の従兄で後見人 Adrian の性格だけが、手固い筆致で描写されている。無骨な商人で愛妻家、しまり屋でうるさ型、貧乏貴族に金を貸し、自分達は働いて得た富で息子達に立派な官職を買ってやれるが、貴族達は借金で贅沢しそんな力もないと嘲笑する増長ぶりを示す。全く terre à terre な存在で、小説を目の敵にし一定の町人用の読物しか認めぬ。彼の portrait でのみ典型的町人の idéologie が表現され、réalisme bourgeois が顔をのぞかせ始めるに止ったのである。⁽¹³⁾

II. Sorel 最後の histoire comique, Polyandre

Fronde の乱勃発の約5箇月前、1648年3月15日印刷完了の Polyandre は、当時大流行の英雄小説 roman héroïque への挑戦であった。1620年から1642年まで全盛を誇った冒険小説も末期で Gomberville の Cythérée (1640-1642) の後、古代史上の有名人物を主人公にとる romans héroïques, Scudéry の Ibrahim (1641), 特に La Calprenède の Cassandre (1642-1645), Cleopâtre (1647) が、読者の熱狂的支持を得ていた。貴族的流行小説の虚偽に強く抗議する Polyandre は、公衆に背を向けられる不運に会い、Sorel は余りの口惜しさに完成を放棄、二巻合計1210頁で未完に止ったのは誠に残念な次第で、再版も1650年版のみである。

主人公 Polyandre は町人で抜け目のない男、全てを利用して世の中を

渡ってゆく。時は二月、謝肉祭の始まったばかりの Paris, Luxembourg 公園で Polyandre はヘボ詩人 Musigène, 徴税官の息子 Néophile を知る。持前の才気で Néophile の恋の指南役になり、その父 Æsculan 今を時めく徴税官の知遇を得て、かねて手を染めていた徴税請負の権利譲渡で利益を収める。Néophile の恋している美しい未亡人 Aurélie のサロンに出入りし自分も彼女に心ひかれる。とかくする中、Æsculan に頼まれて Néophile の心を年上の Aurélie からその妹 Hypéride に移させ、今度は自分の恋の成就を願う矢先、またもや Æsculan が Aurélie を見染めていたことが判明、取持役を仰せつかり思案投首になる。毎朝早くから最新のニュースを集めて廻り、訪問先で語って一座を楽しませるのを忘れない。美貌の独身女性百万人の自称恋人 Orilan, いかさま錬金術師 Héliodore, 寄食者 Gastrimargue, ヘボ詩人 Musigène, 等 Paris' 随一の風変わりな人物達はサロンの尽きざる話題を提供している。Gastrimargue が大貴族に抱えられる幸運到来で一同啞然とするところで話は切れている。

1 Polyandre の現実描写の意図

Advertissement aux lecteurs は副題 *histoire comique* の語を定義し Sorel 旧来の説を若干訂正補足する。

Nous remarquerons qu'il ne faut point entendre par là que ce doivent estre icy des narrations pleines de bouffonneries basses et impudiques, pour aprestre à rire aux hommes vulgaires, parce que la vraie Histoire Comique selon les preceptes des meilleurs Autheurs ne doit estre qu'une peinture naive de toutes les diverses humeurs des hommes, avec des censures vives de la pluspart de leurs deffaux, sous la simple apparence de choses joyeuses.

第一の訂正は、*Francion* に見られた自由で obscène な要素を時代の要求に従い排除することである。第二の訂正は重点が諷刺から性格描写に移行していることである。補足(1)環境の描写《*descriptions en de certains*

endroits》を添えて、読者に《de petites aventures d'une visite de Paris, ou d'une promenade, telles qu'il en pourroit arriver à eux ou aux personnes de leurs connoissance》を語る。補足(2) Polyandreを中心に数人の人物の生活, plusieurs façons de vie の描写に努める。

今回の Sorel の意図は地味で手固い。中世以来のフランス艶笑文学からの完全脱皮であり、悪ふざけのでたらめな生活の夢の否定である。彼の対象は《des Caracteres et des Tableaux》であり、悪しき性格の諷刺にとどまらない。支配階級存在を正当化する流行の roman héroïque の英雄達の半神化した非人間性と、時の王侯貴顕に古代史上の有名人物の姿を与える anachronisme と仮装の拒否であり, romanesque との完全な訣別である。Sorel は Francion で試みた以上に、より多くの人々の日常生活を描いて多様性によって現実を把握しようとする。

Sorel は創作の秘密を打ち明ける。モデルの存在を強く否定しつつ、何らかの点で類似の人物が存在するのは止むを得ぬとする。作中人物や事件が根も葉もない嘘ではなく、現実にあちこちから取材した要素で組み立てた mosaïque であるからである。

Or l'on ne doute point que plusieurs ne desirassent que l'on leur aprist si tout ce qu'il y a icy d'avantures est veritable, sur quoy l'on leur respond qu'il s'en informent eux-memes, et que possible prendront-ils plus de plaisir d'en apprendre des nouvelles d'un costé et d'autre, qu'on leur en diroit à une seule fois.

人物の身分の貴賤や事件の新旧にも変更があると指摘する。

Qu'ils sçachent aussi que les conditions sont souvent desguisées, et que ceux que l'on y fait de basse qualité, peuvent estre d'une plus haute; Que l'on se peut abuser au siecle, et que ce que l'on pense estre arrivé de nos jours, et quelquefois tres-anciens.

この点で Sorel は精密を欠くことが出て来るかも知れないと考えられる。但し、彼が一時代の一環境に限定された特殊事実を、入れ替え操作の対象

にする場合である。例えば *comique* な効果を狙った箇所が無意識的な *chronologique* な小さな誤り、乗物のかごのない時代（1638以前）の指摘⁽¹⁴⁾と小説 *Le fameux Chinois*（1642）への言及の抵触がする。⁽¹⁵⁾

ces livres-cy estant d'invention d'esprit, il ne faut pas penser y trouver toutes les veritez que l'on s' imagine, veu que l'on n'est pas obligé d'y en mettre, et que l'on se peut contenter de choses vraysemblables. Que si mesme il y en a de vraies en leur particulier, il ne faut pas s'attendre neantmoins qu'elles le soient en general.

Sorel の目指す真実は大体において一般的真実であり、この点で古典作家達と共通する。反面、彼は特殊な真実も否定しない。

以上のように、Sorel の発想は誠に *réaliste* なものであったが、実際の作品を検討する必要がある。

2 Polyandre に描かれた現実の対象

1) Foire Saint-Germain⁽¹⁶⁾

冬の終り頃、2週間続く謝肉祭最大の呼物で、フランス全土から地方人が押寄せ、Paris 市民、特に宮廷人が楽しみを求めて繰出すので、その賑は大変なものであった。Sorel は *Le Palais d'Angélie* の中で既に Léonil が Olynthe を見定める 出会いの場として、この市の光景を寸描していた。ダイヤに他の宝石類、金銀の皿、タピスリー、《les gentilles d'Allemagne, et de Flandres》、内外の珍しい選り抜きの品が店頭⁽¹⁷⁾に溢れ、《Les Chevaliers et les Dames richement parees》、あらゆる身分の人々が見物や買物に駆けつける。

やがて Corneille が初期の Comédie, *La Galerie du Palais* で舞台背景に裁判所内に列ぶ商店を選び 商人達に話をさせ 観衆に新鮮な印象を与え、Hôtel de Bourgogne は負けじと 1634 年の謝肉祭の日に *La Foire Saint-Germain*⁽¹⁸⁾ を上演する。同年 *L'Ouverture des jours gras, ou*

l'Entretien du Carnaval⁽¹⁹⁾ なる comique な小冊子がこの喜劇の宣伝と共に庶民の楽しみの場の狂気に近い活況と賭に熱中する人示を示している。Scarron が Gaston d'Orléans に burlesque 詩 *La Foire Saint Germain* (1643) を捧げるに及び、勇気づけられた Sorel は *Polyandre* で約90頁にわたり、市の喧騒を描写する。

Foire はまさに《une vray Image du Monde》であり、時代の移り変わりを敏感に反映している。一昔前に比べて物資の豊富は贅沢と浪費に人々を誘う。銀器、陶器、黒檀の箆筒、大鏡の大量増加の他に、以前で売られることのなかった本が並べられている。今世紀の人々が昔の人より本を沢山買うのは学問のためでなく、《C'est que les livres servent maintenant en partie au luxe des hommes, et que l'on en fait des amas pour les cabinets, comme de tableaux et de Porcelaines. . . . des gens qui à peine sçavent le François, ont ce gros volumes Grecs et Latins, et l'on void des hommes de Finance qui ont bien plus de livres que les Docteurs》。

賭博場では、次の遠征のため受取った前金をする軍人、公金を賭ける役人、大金を賭け身代を危うくする者がある。男性は応援見物の婦人のため一寸したきれいな品を、最も罪のない者はジャムや豆入菓子を賭ける。客廷人や masque をつけた既婚の貴婦人が多数、夜遅くまで宝石店にたむろし賭をしたり見物したり、世はあげて賭博熱に冒されている。

Foire の雑踏はすさまじく、すり、菓子泥棒、衣裳斬り魔が交じる。身分の高い人々は店内から外へ出かねる人の波だ。警吏は安全な場所にしか行かない。剣を振り廻す貴族と一悶着起すと町人に勝目はない。Foire のあちこちで、いかさま勝負がもとで、また押し合いがもとで喧嘩が始まり怪我人が出る。

百姓や下賤の者は grotesque なデトランプ画に目を細める。客に布地を払げてリンネル商の女は言う、《Regardez cette Batiste, qu'elle est

bonne et fine, et qu'elle a les fils serrez.》娘と話している客に宝石商の母親はくっつかかる、《Que comptez vous là à ma fille? ce ne sont pas des quarts-d'escus.》

2) Luxembourg 公園⁽²⁰⁾

晴天の午後に太陽を求めて Paris の良い身分の男女が、馬車を公園の入口に止めて、散歩に集まる。春の訪れを心待ちに《la beauté naissante de l'année》に目を楽しませ、ここから目と鼻の先の Foire de Saint-Germain の賑わう夕刻を待っている。一同は《pour voir ou pour estre veus》に、最新流行の衣裳をつけ公園の中の大通りを悠々と闊歩する。Cours-la-Reine と違って馬車が入らないし雑踏もないので、美しい婦人達の容姿や優雅な歩き方を鑑賞出来る唯一の場所である。残念なことは彼女達が masque で顔を覆っているので、眼の輝きでだまされる。空気を吸い食欲増進の運動のために来た者達は、不具者や憂うつ病患者用の散歩場の方へ、社交界の人ではあるが当日風采が良くないか、《indifferents et esprits forts》に見えたい者は、よく茂った生垣の後に身を隠している。

Sorel は造園の美事さ花々の匂いの描写に止らずに、そこに集まる人間の風俗を観察している。服装によって人間を識別する社会の folie du luxe で、昔日の勤勉は何処へやら coquetterie が日増しに巾をきかすのを示す。

3) 徴税官の邸での舞踏会⁽²¹⁾

これも単なる恋人達の出会いの場所ではない。富と美しい妻を誇示する成り上がり者を、最上のタピスリー、きらめく《chandeliers de cristal ... douze violons des meilleurs de Paris》が象徴する。この場に必要な絹の靴下や白い長靴を泥はねで汚されぬため、何んなに近い所からでも馬車で出かけるし、馬車のない貧乏人は戸口で白長靴に履き替え冷笑される。ダンスを申込むのは婦人の方で、伊達男達は佳人の足許に外套を拵げて坐しお声がかりを待つ。楽しみの最中に招かれざる軍人貴族の乱入であ

る。大声をあげ図々しく婦人達に近づき顔見知りでないので相手にされぬと知ると、踊っている町人の後に影のようについて一挙手一投足を真似てからかい、喧嘩を吹きかける。町人でも頭もよく大胆なのは負けじといい返し、頭の悪い宮廷人をやり込める。並みいるのは町人ばかりと見下し、喪服の貴族を町人呼ばわりで侮辱し決闘沙汰になり命を失う Calidon に、毎度のことと誰も心を動かされぬ。

舞踏会を見物している年輩者達は軍人の粗暴に立腹、町人は心安らかに楽しみも出来ぬと嘆く。お偉方の真似をして人目をひくからだ。《Quoy, un petit Partisan de trois jours, voudra faire le Prince?》罰が当たったのだという旧時代派と、《Qu'il estoit un beau reformateur; Qu'il laissat vivre chacun à sa mode et que pour luy, il croyoit qu'il estoit permis de faire la despense à ceux qui avoient du bien, et que c'estoit à eux à paroistre.》という物わかりの良い新時代派の対照がある。徴税官達の目を奪うばかりの実力伸張は Fronde の乱の不吉な兆候に他ならなかった。

4) 人さまざま —perosonnage sérieux—

Aesculan, 《cet opulent Financier, qui gouvernoit les plus puissans de l'Estat》⁽²²⁾ は、E. Roy に従えば時の大蔵卿 Particelle d'Emery がモデルとされている。⁽²³⁾ 政府の増税政策に高等法院と Paris 市民が反対して決起したことに Fronde の乱は始まるのであるが、Mazarin のお先棒をかついで Paris 市民の憎悪の的であった《quelques gens...de Finance qui mangent le peuple》⁽²⁴⁾ の親玉である。頭がよく金もうけにかけては異常に熱心で何んな小さな機会も見逃さぬ。町人の間では評判が悪い。Madame Ragonde にいわせると《J'ay souvent ouï dire qu'il estoit un peu fesse-matthieu; et que tous ses quarts-d'escus valaient pour le moins vingt-cinq sous》⁽²⁵⁾。彼の家の豪華な食卓には、貴族、文人、術学者、等さまざまな人間が集まり、面白い話に花が咲く。非常に愛想よく、ギリシア・ラテ

ン語は解さぬが銜学者先生の言にぱちぱち手を叩く生来の人の良さや、敬意を表して *ode* を献呈に来た *Musigène* に 500 livres, 約半年は生活出来る金を即座に与える応揚さを示す。客廷の大貴族にいくら詩文を捧げても梨のつぶての扱いに比べ、今や徴税官が作品を売りつけて最も金になる相手である。豪奢を誇示する濫費は醜聞になりかねぬほど甚しい。使用人に十分の給料を払い、出入りの者から心付けをもらうと首を切る。一人息子の *Néophile* の行状や将来を案じ、息子の友人を手厚くもてなす。徴税請負の公務外の私生活は最高のお偉方の振舞を目指し、それは彼自身が自らをお偉方と考えていることに他ならない。

その息子 *Néophile* は甘やかされて育ち、虚栄心強く我儘でむら気である。18才まで *collège* で勉強し、以後法律の勉強をして来たが22才で未だ無官の身である。つい最近まで、楽師に化けて村娘とたわむれ、*Bretagne* の貴族とか、地方商人の息子に変装し身分の低い町家の娘に云い寄り、放蕩していた。*Aurélie* に恋するが彼の奉仕や贈物にもかかわらず、彼女を訪ねて入った部屋で狂女に掴みかかれる災難に会う。金満家の父を持つことしか取柄のない若者との世間の噂や、財産目当ての娘に苦しむ。*Polyandre* に何故か心ひかれて、助言に耳を傾け、恋の成功を願う。女のようにおしゃれで、軽薄で婦人からの手紙を友人に見せ、思うにまかせぬ恋にいらいらし、安易さを求めてばかりいる。恋敵と覚しき粗暴な宮廷人 *Thrasomède* に揶揄されて遺恨を持っているが、面と向うと相手の剣の腕前を恐れて、内弁慶の外すばりぶりを示す。意中を少しも隠しておけぬ愚かさがある。

Polyandre は本心を易易と見せぬ人物、現に宮廷と *Paris* を離れて最近まで帰省していたのは、故郷での徴税請負の仕事を処理するため、好成绩をあげて *Æsculan* の知るところとなり、彼と取引をする。低い身分の出であるが全てに適した人間で、財務にだけ首を突込むつもりはない。自分に役立つ相手に上手く取り入り、自分なしでいられぬように仕向け

る。Æsculan の持出した金もうけの話に冷淡さを装おい、相手を巧妙に自分の思うつばにはめ、乞われて承知する。彼が謙遜さを示すのは自分をより高く売り込める時である。友人の Néophile や関係があり目をかけてくれる人々を決して悪くいわぬので、周囲の信用も厚い。自分の立場を考え、Aurélie への気持を人に感づかれない。浪費と虚栄に走る血気盛んな年は過ぎたが、Paris では人を訪ねるのにしよう洒な身なりが必須と割り切り、婦人にさからわず、愉快的話し手で作家にもなれよう才気を示す。彼はサロンでの精神と会話の遊びの指導者的存在となっている。やかましの昔風の Madame Ragonde 前に風紀肅正を唱える 新宗の僧に化けて現われ、敬虔な dévot ぶりで老女をかつぐ。Tartuffe の偽善と野心とは違って、自分も出来ることならそうしたいがそれでは生きてゆけぬ世の中なのを知っている。狂女の目にも《il a une mine passable, mais il me semble trop sérieux et trop suffisant.》⁽²⁶⁾と映る。教養があり自信たっぷり、表面は波立たぬが最後には自己を貫く人物である。

美しい未亡人 Aurélie は優しい魅力溢れる女性。有力な父親や親戚を持つ Néophile に人一倍愛想よくし、長びいた訴訟に正当な決着をつけるのに成功する。Néophile の接近を他人の思惑をはばかりて妙に警戒することもないし快く訪問も許すが、利口で八方美人、意中を露わに見せぬ典型的社交界の婦人。妹で17、8才の Hypéride、陽気で利己主義で高慢な娘、同年の姪 Phronyme、賢明で落着いた読書好きの娘と三人暮らして、三人共絵画、音楽、文学に素養あり居心地の良いサロンを形成している。大の苦手は突如やって来る祖母 Madame Ragonde である。根っからの町人で儉約質素を説き、口やかましく家中点検し、L'Astrée などの小説の読書、社交生活を非とし貴族を嘲笑する。息子達は貴族並みの特権を有する判事や裁判長なのに、彼女より低い身分の女達より粗末な服装をし、敬虔な catholique である。その来訪は嵐の襲来、娘達は小説を隠しお喋りを止め針仕事を手に持つ。Molière の Le Tartuffe の Madame

Pernelle を予告する。

5) 人さまざま —les grotesques—

謝肉祭の仮装行列の *masques* さながらの醜惡な人物達は、惡徳や奇癖を具現している。彼等は退屈している有閑階級の慰め物になり、社交界の話題を提供する。当人が意識的に自己演出をしている場合すらある。

Comdien pensez-vous qu'il y a de gens dans Paris, qui ne seroient pas si bien venus chez les Grands, s'ils ne vivoient de quelque façon heteroclite? L'un fait le galand, l'autre le desbauché, l'yvrogne, le lubrique, le bouffon et le medisant, et l'autre le Poète; Il pourroient bien mourrir de faim, s'il leur prenoit fantaisie de quitter ces habitudes là.⁽²⁷⁾

財産もなく優れた天賦の才も持ち合わせぬ者達が、糊口の資を得るため途方もない生活をするのを余儀なくされている。*Le Gascon extravagant* (1637) の主人公がそうであったように、彼等は異様な生き方を職業としている。賢人を受け容れず狂人愚人の方を歓迎する世紀の悲惨の象徴である。

稀代の寄食者 *Gastrimargue* は、厚顔無恥、異常な食欲で大貴族や富裕な徴税官の食卓の蠅となる。半白の頭、*Satyre* のような顔、長衣の鼻持ちならぬ *pédant* である。熱烈なギリシア・ラテン語の崇拝者で、食卓で美食の謝礼となるべき話の中に多量に引用、同席者に通じぬことを誇りとさえる。モデルは *Collège Royal* の教授 *Montmaur* である。その毒舌で時の文人 *Balzac*, *Ménage* 等の恨みを買ひ、ギリシア・ラテン・フランス語で多くの *épigrammes* が出廻っていた。*Sorel* は何と約250頁を彼の物語に割く。並み外れた食欲、彼のボロ馬車、花嫁探しの物語が語られるが、非常に誇張した中傷的色彩の強い *caricature* である。*Advertissement* が、悪しき性格の象徴たる人物は実在である必要はなく、《des Chymeres et des Idées》と思って欲しいといっているのを想起するなら、*Gastrimargue* は卑しい食欲という観念の権化である。彼の見合

いはお高く超贅沢好みの Chrysante, 陽気で浮気な Callire, 未来の夫に絶対服従を求める金持の老醜女 Géronte の性格描写の機会を与える。

Orilan はすべての美しい娘達を愛し、誰か一人の奴隷になるのを好まない。彼女達からも愛されているという幻想を抱いている。狂った頭は美女達への奉仕精神で一杯である。娘達の集まる教会をめぐり喜捨に応じ、街々の美女の窓の下を通るので、Paris の名物男となる。Néophile の道化であるが、主人の身に起ったことを使用人達に喋らぬ長所がある。他人の行動に関心がないのだ。サロンではなかなか気のきいた受け答えをし badinage élégant で一同を楽しませる。彼の存在はサロンの遊び jeux galants の玩具である。Orilan と会話をする婦人達の性格や精神を描き、当時の社交界の姿の一端を私達に見せる。また彼は Foire で女商人達に話しかけ、彼女達に喋らせるきっかけを作る。大抵は Orilan のいうことが通じず冷やかしととって腹を立てる。Polyandre が取りなして品物を買ってやると気を取直す商売熱心な社交界と無縁の町人女の姿がそこにある。

貧乏詩人 Musigène は粹な宮廷人の服装を真似て醜惡な身なりで嘲笑的、くぼんだけわしい目、かなり大きな口、曲った鼻、ぎこちない様子をしている。嘘つきで奢侈禁止令が出たと聞いて《que feray-je aussi du passement et des boutons d'or que j'ay sur mon habit de campagne?⁽²⁹⁾》着たきり雀なのである。暇な時に作りだめした詩を相手次第で一寸言葉をさし替えて仕上げ献呈する職人芸をやる。彼の作品はバターや脂肉の包み紙になり、ねずみにかじられる運命を辿る。Æsculan を讃える ode は、何でも口を出して批評したがる Gastrimargue の酷評を浴びる。仏語は乳母や子供の言葉だという pédant に、《C'est la langue de nos Princes et de toute leur Cour... j'ayme mieux la sçavoir qu'une langue morte.⁽³⁰⁾》と理性の代弁者ともなる。厚かましく寄食者になる位なら、屢々食事なしでいる方を選ぶ。その愚鈍さは Polyandre の総明さを

ことある毎に引き立てる機会を与える。

鍊金術師 **Héliodore** は巧妙極まるベテン師、長寿や美の保持を約束したり、化金石を得る秘法を伝授するといったりして、各地を移動し人々をだまし金銭をかすめとる。⁽³¹⁾ 偽善者で傲慢不遜、卑劣で享樂的、他人の幸福の破壊者で非常な危険人物だが、理性の目の曇っていない人々の前には弱い。*Le Page disgracié* (1643) も *Tristan l'Hermite* のような知識人が化金石の存在を疑わぬ時代の輕信を示す。**Sorel** は同時に良識ある **Péralde** や **Mélinte** 父子の性格を浮彫する。

Clorinie は《*Archi-coquette*》⁽³²⁾ である。さる名家の貴族の夫人だが夫に愛情が持てず彼の方でも同様、一方が **Paris** に居ると他方は郊外の別荘に居るという生活である。彼は生前から教会の中に墓碑を建立し、妻は友人の前で《*Mon feu mary*》⁽³³⁾ と大真面目で口をすべらす。彼女は自分が宮廷随一の美女で生れの点でも敵う女はないと思いつている。未婚の娘のように沢山の男達の訪問を受け、甘い言葉をささやかれるのが嬉しくてたまらない。客を迎える部屋は光と影の部分に分たれ、彼女は影の方に座し美しく見えるよう演出を怠らぬ。毎日、付けばくろの位置を変え、同時に自画像の付けばくろも変える。朝寝、ブイヨン、**eau argenteé** と美容法の実行に余念がない。鍊金術師が80才まで美を永続させる水を約束したのを信じて疑わぬ。陽気で大胆だが頭の回転は悪いし才気もない。鏡中の己が姿に見入り錯乱状態に陥る。全ての男の熱い視線を頬に感じ、到る所に溜息を聞く。《*Je ne sçay plus que faire d'un si grand nombre d'Amans*》。⁽³⁴⁾

これらの **grotesque** な人物は当時の喜劇で人気のあった **types** にも着想を得ている。**Sorel** は公衆の嗜好に敏感であった。彼の念願の人さまざまの性格描写は、真面目な人物達と醜惡な人物達の接触のかもしれない **Contraste** によって変化に富むものになっている。屢々、後者が前者の性格をひき出す働きを演じているのが、興味深い。**grotesque** な人物達は単にサロンで一座の人々を楽しませるだけの存在ではないのだ。

3 Polyandre の réalisme の特徴

1) Réalisme satirique

悪しき性格と風俗の諷刺は、言論の自由抑圧下でいきおい控え目にならざるをえない。徴税官達の栄華はそれを可能にする悪徳を暗示するが、具体的にその悪辣さや通常早かったと言われる没落を語るに及んでいない。事実、彼等を槍玉にあげることは危険であった。後年 Sorel は *Le Chemin de la Fortune* (1663) でこれを試みて訴えられ、同書を外国へ流さねばならなかった⁽³⁵⁾。保身を願う作家達には、非重要人物、弱者の攻撃しか可能でない。それは術学者、貧乏詩人、俄仕込の客廷人と言った types にマンネリ化し勝ちである。

Sorel の観察した coquetterie と賭への狂癖は、Louis XIV 世時代の進むにつれひどくなる一方であった。この点で彼の諷刺は的を得た先見の明あるものであった。

2) Réalisme grotesque

諷刺の限界から定型化し勝ちの人間の types に変化を狙う手段として、着物、動作、顔付、等細部の滑稽な描写に走る。Musigène の脂垢に光るすり切れたボロ着を長々と描写するの類で、意味のない細部への執着は現実の雰囲気を作り出すより奇をてらい esprit を誇る遊びに陥る危険がある。美しい対象の細部は大低素通りする。当時流行の burlesque 詩への押え難い嗜好の反映でもあったし、style comique そのものが Francion の女術 Agathe の醜貌描写の執着を捨て去るところか、より一層固執している感を受ける。Fronde の乱の最中に Mazarinades として爆発し、genre burlesque が最盛期を迎える兆がある。尤も Polyandre は obscene ではないけれど、方向は同じである。

3) Réalisme bourgeois mondain

賭を危険な遊びとして斥ける Sorel は、既に「遊びの館」*La Maison*

des jeux (1642) の *Advertissement* において、《*Jeux d'esprit et de conversation*》を推奨し、さまざまな遊びを説明していた。六年後に書かれた *Polyandre* は、その延長線上に交点を持つ。*Æsculan* 邸や *Aurélie*, *Clorinie* のサロンに集う人々は *Gastrimargue* を除き一同礼儀作法をわきまえた人々で、宮廷風の礼の仕方や貴婦人に対する礼の仕方、礼儀に叶った挨拶の言葉遣いや作法を教えてくれる。座興としての *narrations* で錬金術師、寄食者の物語、*Céphize* の偽似誘拐事件の物語が語られる。*Orilan* は *badinage* にもってこいの相手。一同 *subtilité* に感嘆し *pertinence* に物を言う精神の *élégance* を大なり小なり求める人達である。また、*tours innocents*, 例えば赤毛の *Orilan* のかつらを釣針にひっかけて宙に吊り上げたり、宴会があるとだましておびき寄せた生意気な *Gastrimargue* の飢えに苦しむ姿を物蔭で見物したりするのも、遊びと解される。詩や小説を作り朗読することも遊びに他ならない。

勿論、*comique* な照明下であるが *Polyandre* は、社交生活をする高級 *bourgeoisie* の姿と、その *idéologie* の表現である。これは金銭や富、それだけで栄誉の座に就く町人を軽蔑していた *Francion* 子爵の精神からの貴族としての *idéologie* の表現である *Histoire comique de Francion* との著しい違いである。

Sorel が欲求した 《*Histoires entierement vray semblables, et qui décrivissent agreablement la manière dont on vivoit dans le monde*》⁽³⁷⁾こそ、*histoires comiques* であり、*Francion* 以後の思想言論の自由の弾圧が *Polyandre* をして強力な諷刺を持つ思想書たり得ず、《*un Livre comique... Qui parust plutôt par les Discours subtils et agreables des Gens de moyenne condition*》⁽³⁸⁾にならしめたのは、止むを得ぬ移行であった。公衆の不評にもかかわらず、*Polyandre* は貴族と覇を競い始めた当時の *bounrgeoisie* の世界を描き、来るべき *Furetière* の *Le Roman bourgeois* (1666) に道を開いた作品として、17世紀小説史上重要な価値

を持つ。

注

- (1) *La Bibliothèque françoise*, p. 177.
- (2) *ibid.*, p. 175.
- (3) *ibid.*, p. 181.
- (4) *Les Nouvelles françoises*, p. 384.
- (5) *Francion*, p. 260.
- (6) G. Reynier, *Le roman réaliste au XVII^e siècle*, pp. 1-55.
- (7) M. Molho, *Introduction dans Romans picaresques espagnols*.
- (8) *Francion*, p. 1262.
- (9) *Le Berger extravagant*, III, p. 533.
- (10) *La Bibliothèque françoise*, p. 176.
- (11) *ibid.*, p. 407.
- (12) *Le Berger extravagant*, I, p. 109.
- (13) *ibid.*, I, pp. 13-18, II, pp. 339-340, p. 347, pp. 362-363.
- (14) *Polyandre*, I, p. 177.
- (15) *ibid.*, I, p. 520.
- (16) *ibid.*, I, pp. 455-545.
- (17) *Le Palais d'Angélie*, p. 306.
- (18) A. Adam, *Histoire de la littérature française au XVII^e siècle*, I, pp. 491-492.
- (19) *Variétés historiques*, II, pp. 345-355.
- (20) *Polyandre*, I, pp. 3-7, pp. 20-21.
- (21) *ibid.*, I, pp. 177-200.
- (22) *ibid.*, I, p. 443.
- (23) E. Roy, *La vie et les oeuvre de Ch. Sorel*, p. 189.
- (24) *Polyandre*, I, p. 436.
- (25) *ibid.*, II, p. 333.
- (26) *ibid.*, I, p. 432.
- (27) *ibid.*, I, pp. 156-157.
- (28) *ibid.*, I, pp. 307-354, II, pp. 424-617.
- (29) *ibid.*, I, p. 381.
- (30) *ibid.*, I, p. 302.
- (31) *ibid.*, II, p. 48-214.
- (32) *ibid.*, II, p. 5.

- (33) *ibid.*, II, p. 4.
- (34) *ibid.*, II, p. 14.
- (35) E. Roy, *op. cit.* p. 388.
- (36) *Polyandre*, I, pp. 12-14.
- (37) *La Bibliothèque françoise*, p. 398.
- (38) *ibid.*, p. 401.

Bibliographie

Textes de Charles Sorel

- 1. *Polyandre, histoire comique*, Paris, chez la veuve Nicolas Cercy, 1648.
2 vol.
- 2. *Le Palais d'Angélie, par le sieur de Marzilly*, Paris, Toussaint du Bray, 1622.
- 3. *Les Nouvelles françoises*, Paris, Pierre Billaine, 1623.
- 4. L. *Histoire comique de Francion*, dans *Romanciers du XVII^e siècle*, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, 1958. Textes présentés et annotés par Antoine Adam.
- 5. *Le Berger extravagant*, Rouen, chez Jean Osmont, 1646, 3 vol.
- 6. *La Maison des jeux*. Paris, chez Nicolas de Sercy, 1642, 2 vol.
- 7. *La Bibliothèque françoise, Seconde édition revue et augmentée*, Paris, 1667.
- 8. *De la Connaissance des bons livres ou examen de plusieurs auteurs*, Paris, André Pralard, 1671.

Ouvrages consultés

- 1. G. Reynier, *Le roman réaliste au XVII^e siècle*. Paris, 1914.
- 2. M. Magendie, *Le roman français au XVII^e siècle, de l'Astrée au Grand Cyrus*, Paris, 1932.
- 3. E. Roy, *La vie et les oeuvres de Charles Sorel*, Paris, Hachette, 1891.
- 4. A. Adam, *Histoire de la littérature française au XVII^e siècle*, Paris, Damat, 1948-1956, 5 vol.
- 5. *Variétés historiques et littéraires*, Paris, chez P. Jannet, 1855-1863, 10 vol.
- 6. Tallement des Réaux, *Historiettes*, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, 1960-1961, 2 vol.
- 7. *Introduction* par M. Molho dans *Romans picaresques espagnols*. Bibliothèque de la Pléiade, Paris, 1968.

(文学部助手)